

子どもと保育の情景 (11)

保育における偶然と必然

戸田雅美

梅雨の時期らしい曇り空のある日のこと、五歳児たちはお弁当の前に、グループで当番活動をするようになった。子どもたちは、その日のやることを示す表を確認しては、持ち場に動いて行った。あるグループは、植物の水遣りをしたり、また別のグループは、年少の子どもたちが残してしまったおもちゃを探して片づけたりと、子どもたちなりに張り切って取り組んでいる。

その中で、私は、ウサギ小屋でウサギの世話をしているグループを見に行くことにした。そのグループのメンバーにはつかさがいたからである。一か月ほど前にこの幼稚園を訪問したとき、たまたまクラスでの活動に入ろうとしないつかさとかかわることに

なり、そのときの印象が強く残っていたからである。つかさは、クラスの友達も担任も、熱心につきさを誘っているにもかかわらず一緒に行こうとせず、私が話しかけても、「やりたくないんだよ。だから、行かない!」と言って、平然と部屋に残っていた。このときの様子が気になっていたからである。

この日のつかさは、特にこだわることなくグループのメンバーと一緒にウサギ小屋に入っていた。ウサギが、つかさの周りにやって来ては、足元をうろし、つかさもそれがおもしろいというように、ウサギの相手をしたりしていた。そして、水飲みのビンを取り外すと、ビンを持ってウサギに近づけたりしてふざけていた。ふざけたついでに、ウサギが

掘ったトンネルの入り口をわざと踏んで壊してにやにやしていた。おやおや、当番の場には来たけれど大丈夫かしらと私は少し心配になって見ていた。

そのことに気づいた、同じグループの**すず**と**さや**こは、「あーあ、こわれちゃった」と言ったのだが、特に**つかさ**を責めることもなく見ている。実は、この少し前、**さや**こが、もう一つのトンネルの入り口を、うっかり踏み抜いてしまったのだった。

さやこは「ウサギがいなくてよかった。でも、靴も靴下も汚れちゃったあ」と言い、**すず**が、「あとで取り替えれば？」という会話があったばかりだったのだ。**つかさ**は明らかにわざと踏んでいたのだが、直前にうっかり踏み抜くという事件があった二人には、**つかさ**もうっかりやってしまったのだろうと思っただけらしい。

すずが、のんびりした調子で、**つかさ**に「ねえ、水くんできてくれない？」と言うと、**つかさ**が、あっさり**と**ピンを持って水道に走って行くのを、私

は、驚いて見ていた。以前の**つかさ**は、こんなことを言われると、必ず何か彼なりの抵抗を試みずにはいられない感じだったからである。トンネルを踏み抜いたずら責められなかったことも、彼の心をやわらかくさせていたのかもしれない。水道に走っていった。**つかさ**は、ビンの中に水を入れては振って出すという動作を繰り返し、なかなか熱心に洗っている。

水をくんで小屋に入ってくると、**つかさ**はかなり唐突に、飲み口をウサギの口に近づけた。そんなふうに口に突きつけたら、ウサギは飲んでくれないのではないかしら……という私の心配をよそに、**つかさ**の手にしたビンの飲み口から、二羽のウサギは争うように夢中で水を飲んでいる。きっと、とてもどが渴いていたのだろう。**つかさ**自身も、ウサギがそんなふうにな水を飲むとは思っていなかったらしく、ちょっと不思議そうにじっと見ていたかと思うと、次第にそれまで押し付けるように飲み口を口元

に差し出ししていたその感じが優しげになるように見えた。

私は、このつかさの変化がうれしくて、思わず「ウサギさん、のど渴いていたんだね。つかさ君のくんできてくれたお水、おいしそうに飲んでるね」と声をかける。すると、「そうだ!」と言うように、手に持っていたピンを所定の場所にかけると、さっと走って、キャベツを手に走って戻ってきた。

そして、今度はキャベツをウサギの口元に差し出す。これも、ウサギたちには、大歓迎だったらしく、つかさの手から、むしゃむしゃと食べる。そのうちに、キャベツの芯の硬い部分はあまり食べようとしないうちに気づき、葉のほうを選んで差し出したり、芯は手で細かくちぎったりして食べさせようと試みる。

「ウサギたち、お休みが続いた後だったから、おなかすいていたんだね。つかさ君のあげたキャベツ、夢中で食べてるじゃない! お休みの前のお当番の

人が入れておいたえさが、少なかったのかも

しれないね」と声がす

る。振り返ると、担任

が、にこにこしながら

ら、つかさとウサギの

様子を見ている。「ね

え、えさ持ってきて

て!」とつかさは、す

ずとさやこの方に向かって言いながらも、自分は

キャベツをやるのに夢中である。すずは、その姿を

見ると、糞の掃除で忙しい自分の手を止めて、言わ

れたとおりウサギのえさを取ってくる。

「ぼくが、えさをやるから!」とつかさはすずからえ

さの入れ物を受け取ると、さつさと、ウサギ用の皿

にえさを入れる。ウサギは待ちきれないというよう

に、もりもり食べる。すずもさやこも、「すごい食

欲だねえ!」と言い合って驚いて見ている。つかさ



は、二羽のウサギが、うまく一緒に食べられる置き方を探していたが、最後は、小屋の奥まった場所に置いた。そのとき、再び戻ってきた担任に、「うん、そこだと安心して、二人で食べられるね」と言われ、ふっと立ち上がったつかさの表情は、いつになくすっきりと楽しそうだった。

保育が終わった後、担任が「今日は、つかさ君にとってウサギたちが本当によかったです。おなかすかせてしまつて、ウサギたちにはかわいそうだったのですが…」と言う。私が、トンネルを踏み抜いた前後の話をすると、「そうなんです。つかさ君、ウサギと遊ぶと、必ずわざとやるんです。でも、うっかり踏んでしまう子どもも、多いんですけどね、狭い小屋の中にウサギが自由に掘ってしまうものですから仕方ないんです」と言う。

私が続けて「トンネルを踏み抜いたつかさ君も、自分たちと同じで、偶然だったのだらうと思えるあ

の二人は、穏やかな感じですよ。えさにしても、自分たちだつてやるチャンスはあったのにつかさ君の気持ちを優先していたり、それに、糞のお掃除も本当に楽しそうにやっていたり…。グループをつくるときに、メンバーは考えたのですか？」と聞く。すると、担任は「もちろん。考えてました」とにこやかに答えてくれた。当然のことながら、ちょうど良いタイミングでつかさに声をかけたのも、単なる偶然ではなく、つかさのことを気にかけている、保育者の思いがあったからであろう。

保育の中では、たくさんの偶然が起こる。もちろん偶然を予測しておくことは不可能であるが、保育は基本的に、偶然に対して開かれていなければならぬ。こんなふうには、偶然が、一人の子どもの心持ちを変えることも多いからである。しかし、その偶然を、子ども一人ひとりにとって意味のある経験につなげていくことのできる必然が、保育の中には、たくさん用意されている。

(東京家政大学)